

国立大学法人と芸術専門学群の教育

石井武夫

芸術学系教授 芸術専門学群長

法人化について

平成16年から国立大学が法人化され、本学が国立大学法人・筑波大学となった時、どのような態勢を整えているかについて、今全学が懸命に考えている。改革のきっかけとなったのは国の経済の悪化、18歳人口の減少、大学院の大衆化など大学教育をとりまく状況の変化で、これに対応せざるを得なくなったのである。

そこで文部科学省から発表された方針、そして本学の将来計画の中での芸術専門学群の教育についての考え方を明確にしてそれを実行して行かなければならない。内部評価、外部評価が組織的に実施され、その結果がやがて運営費交付金にも反映されるとなると、将来の明るい展望を得るためにも継続的に改革について考え、実行していくことが必要となる。

芸術専門学群の教育

芸術専門学群の4専攻は学究的論理的

要素が必要な「芸術学」、個性的で強い表現意欲を支える技術的要素が必要な「美術」、感性と理知がバランス良く必要な「構成」、絶えず新たな発想を持ちそれを具体化する手段をも開拓する構想力が必要な「デザイン」と、それぞれ感性という共通のグラウンドに立ちながらその違いはかなりはっきりしている。4専攻は現在、更にその中に、芸術学、洋画・日本画・彫塑・書・特別カリキュラム版画、構成・総合造形、視覚伝達デザイン・生産デザイン・環境デザイン・建築デザイン、という12の分野を持っている。専門学群といってもこのような多様性を内包する我が学群はどこから見ても大変身を遂げたと思われるような変化を引き起こすことはなかなか難しい。

FDについて

今まで強く意識されなかったアカウンタビリティ、つまり、外部や学生、父兄

に対する様々な説明責任を遂行することや、所謂FD（ファカルティ・ディヴェロップメント）として教員同士で、よりよい教育技法を模索したり、国内他大学や外国の大学の教育現場を視察する。学生による授業評価も学生にとって書きやすく、教員にとって授業の良い参考となるような評価方法を見出すことなどで教育の質の向上と透明性を増すことができる。現在芸術では「FDワーキンググループ」を組織しそれらの課題の検討を進めている。

新分野の創出

芸術専門学群の専攻・分野は時代の文化文明を鋭敏に反映する。解りやすい例ではデザインのように、用いる媒体、たとえば印刷、テレビ、コンピュータのように次々に新たなものが登場しそれぞれにデザインが必要とされると対応する手段も変わり、教育も変化する。そこで先ず魅力ある新分野を創出することが必要となる。これは数年前より、大学改革の気運の中で胎動し始め、平成15年に「芸術環境支援学」と「クラフト」、「情報」が新分野として登場する。芸術環境支援学は芸術を社会の中でもっと有効に働かせ、人間の活性化に役立たせる方法を研究する分野である。アートマネジメント

や文化遺産の保護、芸術行為の社会的な応用などを研究し芸術の新たな価値を創出することを目指す。

「クラフト」は陶芸、ガラス工芸、木工からなり、手を使い、物を造る分野である。機械化された現代社会において、最も必要とされる表現形態である。

「情報」はコンピュータを駆使してさまざまな伝達内容をより分かりやすく伝える技術とデザインである。これらの新分野に対応する科目を研究科にも設置して発展を図ろうとしている。将来においても更に筑波の芸術だから出来る新分野を創出していくことが大切である。

総合大学の中の芸術専門学群として

国立総合大学において芸術を専門に教育する組織は本学の芸術専門学群のみである。この特色をもっと生かしたいと願っている。芸術の学生や教員は他の学群や学系からもっと多くを学ぶべきだし、又、多くを提供すべきだと思う。今までも芸術で全学向けに提供している科目、「絵画実習」「書実習」「陶芸」には多くの学生が参加し施設が不足している。これ以外にも新設される「ガラス工芸」や「木工」も全学向けに開講する予定である。物を造ることによって精神が集中し、創造性を養い、前向きで個性的な人

間形成を助ける。指導する教官も芸術専門の学生とは少し異なった視点から創造性を開発するような全学向授業について研究することが必要である。又希望すれば誰でも受講できるだけの全学向け講座の専用施設が必要である。

学群としての地域貢献

今年度地域貢献の一形態として大学内学生施設のリニューアルに学生を組織して若手教員の指導のもとに改装工事を行った。指導する教員は大変だったと思うが学生にとっては実際的なインテリアデザインと施工に参加することとなり、建物の構造や素材、そこに施される内装の種類や材質、色彩など教室だけの授業では得ることの出来ない体験をした。

このように実習よりも更に現実的で失敗を許されない経験は貴重であると同時に地域一この場合は自分達の生活の場である大学構内であったが一への貢献がどのような欲びをもたらすかを知る機会ともなる。今後このような形態やさらに別の形でも大学外の地域にも貢献できるような活動を考えていきたい。

一般的な学群教育

芸術専門学群の教育は各分野の専門家となるための基礎的知識や技能を修得で

きるようカリキュラムを組んでいる。専門分野だけでなく必要と思われる科目は他分野の科目も幅広く組み込んでおり、他の美術系大学にはない特徴である。芸術のなかでの学際的カリキュラムといえる。

芸術研究科に実技系の博士課程が設けられたのは学群にとっても革新的なことであった。国際レベルの専門家を育てることが出来るからであり、そのような責務も生じてきた。このような事実を視野に置いて学群教育を考えると、今まで以上に学際的教育や創造性を重視した教育を行わなければならない。

独自の改革を

以前アメリカに10年以上仕事のため滞在し、お嬢さんがアメリカの大学で絵画を専攻して卒業し、帰国された方と大学教育について話す機会があった。そのお父さんH氏は「日本はアメリカの教育に近づいているようだが、それには矛盾がある。別のジグソウパズルの同じ位置にあるピースをもってきて無理にねじ込もうとしても入らない。周囲の組織・文化が違うから」と言っておられた。解りやすいたとえで感心したが、無理のない良い方向の改革を進めたい。

(いしいたけお 美術・洋画)